

# 泥棒とイーダ

第12回 砕けた青、飛び散る破片

牧田真有子

史乃<sup>し</sup>が暮らす古い屋敷へ、やがて石崎美術館へ通じる道は、竹林に縁取られゆるやかな湾曲を繰り返す。私の自転車はぞつとするようなスピードを出している。とにかく時間との勝負だ。史乃は自宅にいた。拍手喝采したいくらいだった。両手がまだハンドルを握っているうちに居場所を確かめられたのは、彼女が庭にいたからだ。

いや、彼女たち、だった。

幅広い垣根越しに見えた史乃は、三人の女友達と縁側に腰掛けてお喋りしていた。私は自転車を荒く停めて勝手に門をあけ、言葉もなく大股に近づいた。彼女たちはむしろ自転車の倒れるがしゃんという音でこちらを向いた。

「史乃」

歩きながら私は呼んだ。焦りで息が切れていた。

「あれ、勝見<sup>かつみ</sup>さんだ」

女の子の一人が愛想良く言った。私は彼女の顔も名前も知っていたが、そのときはモノとしてしか映らなかった。黒光りする床板や、床に置かれたグラスと同じように。そういうことはやすやすと伝播<sup>でんぱ</sup>するらしい。史乃の友人たちは曖昧な距離をとじこめた目に変わって私を注視した。

「史乃」

「もしかして、会のこと？ 何かあったの」

史乃は割に落ち着いて尋ねた。私が首を横に振ると初めて、他の女の子たちと同じような目つきに変わりそうになった。私は言った。

「盗品が戻された。私が史乃に借りを返せるとしたら今かもしれない」

そのとたん史乃は床板に手をつけて立ち上がった。ほとんど表情がな

かった。舌がもつれそうになりながら私は続けた。

「まだ間に合うかどうか、行って見ないとわからない。時間がなくて。来て。自転車の、後ろ、乗って」

今行かなければ、あのオブジェを真作とみなしたまま時間が止まっている長年の仮綴は、一気にほじめてしまいかねない。

史乃は来た。実際には女の子たちの肩を押し遣るわけでも、黄色や紫色のジュースが注がれたグラスをまたぐわけでもなかったが、その長い手足で光景自体を掻き分けてくるように見えた。掻き分けられたあとと光景を私はもう正確に見ることができなかった。私は自転車の後ろに史乃を乗せて竹林の道を走っていた。すれ違う車が譲りあっている狭いカーブの路肩ぎりぎりを、すでに冷淡な安定感すら生じている猛スピードで吹き抜けていく。私は正面を向いたまま彼女に経緯を説明したが、慌てていて支離滅裂で、本当のことを言っているのになぜか空々しかった。しかし史乃は何も訊かず私の両肩に指をくい込ませていた。

美術館の受付で、監視員のおじさんが飄々とした顔つきで伝票か何かを繰っているのが見えた。十五年前に盗まれた展示品がさりげなく持ち場に戻っているという一大事には気づいていないようだ。一秒さえ惜しまれて、私はそのままアプローチに乗りつけようとした。

「とめて」

史乃が言った。私が急ブレーキを掛けるやいなや彼女の白い体が自転車から降りてきた。仮面をつけているかのように表情は硬いが、史乃の声は、きわめてしつかりしていた。

「二人組としてじゃなく時間差で行こう。亜季が先に入って。私はあのおじさんを足止めしておく」

私は彼女の手首を見、彼女は腕時計を見えやすい位置に上げてくれた。「入館は四時半までだから、気をつけて」と私は言った。二人とも同じくらい汗をかき、皮膚は魚の表面みたいにてらてらしていた。

複数に分割されて館内が映っているはずのモニター画面は、こちらの角度からは見えなかった。入館料の五百円を差し出すと、おじさんは

「五時に閉館だけど構わないかな」と言った。「駆け足で見ます」とにっこり答えた。本当に走りたいたいと思いながら私は壁沿いに進んだ。茶道具のコレクションが並ぶ最初の空間から隔たれた、第二展示室に足を踏み入れるとき、史乃のはきはきした声を背中で聞いた。私は壁に即すのをやめ、遠目に作品を見渡すようにゆっくりと首を回しながら、足は『無題Ⅴ』までの最短距離をみるみる詰めた。それを載せた台座は第二展示室から階段に至るスペースにある。盗難の目撃情報を募る色褪せた貼紙が見え、私はほっとした。「何ごともなかったかのように二元通りにする」ため、その乾ききったセロテープをぱりぱりと剥がしかねないのが佐原さんである。しかし美術館が監視カメラの記録を遡るきっかけがあつてはならないのだ。

縦に細長い窓から射す光が、『無題Ⅴ』の青い鱗を近寄りがたく輝かせていた。でもこれは贗作がんさくなのだ、と私は低く思った。その影のように、痛みが、心の底を走った。——自分というものの痕跡を消すため頑なに条件を守ろうとして十五年近く保留し続けていた盗品を、考えが正しくまとまらないまま返してきた佐原さんは、まるでニセモノだ。彼の固定ファンがネット上で勝手に象かたどつてきた、「慈悲深い代表」を私はずっとまがい物だと思っていた。けれどセツの言うように、その方が近未来の本物の彼女のだとしたら、今あのアパートにいる佐原さんは贗作みたいなものだ。

階段に片足を掛けて私は思い切り耳を澄ませた。下から覗き込んでも見える範囲はごく一部だが、おそらく二階には誰もいない。リュックサックの口を大きくあけ、焼き物を包むためのタオルを掴つかみ取ったときだった。細長い窓ガラスの向うをメタリックな緑色の自動車が通っていく。見覚えのある車体だった。

石崎家いしざき当主のながらが声が入り口から聞こえたとき、私は体からあらゆる動きが拭い取られたようになって、立ちすくんだ。

「タクさん、これの襟巻き、拾ってくれてんだろ」

「何をですって？」

「まだなのね。私のストールよ。さっきここで落としていったみたいなの。腕に引っ掛けて絵を見てたから。ユーラルピンクのやつよ」

夫人の声もする。

「何色ですって？」

「鮭の切り身みたいな色だ。信じられるか、そのためにわざわざ引き返せって言うんだからな。六時から会食だっていうのに」

「あれがないとこんな色の靴を履いてる理由が自分でもわからなくなるのよ」

「とにかく探して参りますんで」と監視員が言うのと、とにかく盗らなければ、と私が手を伸ばすのと、「あれ、長村ながむらんこの」と当主が史乃の素性に気づくのと、ほぼ同時だった。それから重量感のある声で全部を覆ったのは、当主だった。

「待てよタクさん、それでパツと見つけられるんじゃないの」

ここからは見えないが、当主が監視カメラのモニター画面を指か顎で示しているのは間違いない。私の鼓動は何かを追い抜こうとするように速まった。

「さすが。頭の回転数が私らとは桁違いですな」

「電気代だけは順調にかかっているんだから、たまには役立ってもらわないとね……ちよつとあなた、大丈夫？」

「おい、パイプ椅子もつてきてやれ。タクさんは水だ。君、立てるか」

「かわいそうに、貧血ですかね。若い子は鉄分とらないから。さっきまで茶道具のキャプションのことで熱心に質問してたんですが。おたく、茶杓ちやしやくの研究よりレバーお食べなさい」

私は階段を駆け上がった。足音は絨毯じゅうたんがごとくと吸いとつてくれた。第三展示室の、竹藪たけやぶで展望が粗く塞がれた窓のそばにストールは落ちていた。見当もつかないままフロアに躍り出て、ターゲットの方から呼ばれるみたいに即座に見つけ、一度も足をとめないまま掴み取った自分は、腹を空かせた獣めいていた。階段を降りて第二展示室を斜めに突っ切り、慎重に受付を見遣みまると、三人はまだ史乃につきつきりだった。いくらそ

の父親との間に確執があったとしても、体調不良の来館者を邪険に扱うわけにはいかないのだろう。史乃は膝頭だけ揃えてあととぐんにやりとパイプ椅子に身をゆだねていた。時間稼ぎとはいえ迫真の立ちくらみだ。まだモニターチェックが始まっていないと見るや、私は足音を立てずに階段前の台座まで戻った。

今誰もモニターを見ていなくても、誰からも永遠にチェックされなくても、私の頭の中にはくつきりと監視カメラのレンズを通した映像が伝送され、モニター画面が浮かび上がっていた。『無題V』を盗む、泥棒としての自分の姿が。

少しだけ嵩かさのでたりユックを背負い、第一展示室を通って、「二階にストールが落ちてました」と何食わぬ顔で受付に声を掛けた。史乃以外の全員がこちらを向いた。本当に何食わぬ顔ができていたかどうかはわからない。もう頭の内に監視カメラの四角い画面は浮かび上がっていない。背の高い夫人は、ごく幼い子どもが相手であるような礼を言った。私は彼女の足もとを一瞥いちべつした。珊瑚色さんじょの襟巻きが、その黄色すぎるハイヒールをどのように正当化するのは不明だ。小柄だが遅たぐましい体つきの当主は整髪料の匂いをぶんぶんさせていた。鷹作たかすけとはいえ私はこの人の所有物を盗んだ。椅子に倒れこんでいる同い年くらいの人物を、私は首を傾げて覗き込み、声を上げた。

「あれ、史乃？」

「同じ学校かね」監視員のおじさんが言った。

「亜季」史乃は薄目をあけた。「いつもの貧血で。だいぶましになつてきたみたい」

「私らもう行かなくちゃならなくてね。車で落としてってやろうか？ どうせ通り道だし」

「ありがとうございます、でも少し吐き気があって。ゆっくり歩いた方がよさそうです」

「私が史乃の家まで送り届けますから」

監視員は見送りを済ませると閉館時刻の迫った館内を見回りに行き、

当主夫妻の自動車は会食の場に向かって発進し、泥棒たちは反対方向に歩いた。五時前とはいえ空はまだ昼の色のまま地上を広々と見下ろしている。ハンドルを押していた私は振り向いて、もう視界のどこにも緑の車体がないのを確かめ、史乃の家がある方へ自転車をターンさせようとした。

「川の方、通ろう」

史乃が言った。そうすべきだと私も思った。史乃は後ろに乗り、上り坂にさしかかると降りて伴走し、土手でもう一度私の両肩に勢いよく手をかけた。私たちは犯行現場から一旦遠く離れたかった。蛇行する川の形に沿って自転車を走らせる。さざ波に細かくちりばめられた光が眩しかった。二人とも無言だった。対岸から草野球の声が響いてくる。

停電のときを狙う。もっと大胆に、意図的に停電を起こす。死角から監視カメラに映らないルートを割り出す。カメラの角度を動かす。私なりに考えていた、それらしい手続きは全部とばしてただ持ち逃げすることになったのは、自分の所業ながら絶句するほかなかった。でも私の沈黙の中身はそれだけではない。他の大部分は、一つの気づきが占めていた。

泥棒になんて、生まれて初めてなるくせに、どうしてこんなに違和感がないのだろうか？　まるで、これまでもずっと窃盗犯として逃走の最中だったみたいに。

佐原さんが命を救ってくれたとき、赤ん坊の私は救われたという自覚すらなかった。何からも隔たっていなかったのだから。そういうところから佐原さんに盗まれたものとして、自分をとらえた時期が、たしかにある。でも今は違う。イーダの人たちに共鳴してまじり合って、大きな存在の一部となることに心のどこかで惹かれつつけて、それでも今、盗賊みたくに勝負亜季を奪って逃走しているのがわかる。もし盗品の中身が空っぽだとしても——あらゆる可能性のひらかれた豊穡な場所からもぎとった瞬間に、その中身は空っぽになってしまいうものだとしても、盗んで走っている感覚の克明さは決して空虚ではなかった。

背中が熱かった。リュックサックの中で、鱗をびっしりと纏まとった青い焼き物が温まっている。大きな橋のたもとまで来て私の自転車はくるりと向きを変えた。

史乃の友人たちはどれほど意表を衝かれてもマナーを守るらしく、きつちりとグラスの集められた円い漆の盆が、縁側に見えた。史乃に促されて門をくぐり、柳の下の石畳で、どちらからともなく足をとめた。「間違つて奥さんのストールで包みかけた」と言いながら、タオルでぐるぐる巻きにした『無題V』を差し出す。長い髪を、胸の前に乱れた形で静止させたまま、史乃は両手で受け取った。私は彼女の顔を見上げた。「チカは私にしか秘密を言つてない」

「わかつてる」

余裕のない大きな声で史乃は言った。殴られるかと思つた。久しぶりにそう思つた。今しがたまで無表情だつたその顔に、ちらちらと苛立ちが閃いている。私は平気なふりをして口をひらいた。

「実は私も、史乃と似たことを思つてイーダ会に興味を持ったの。でもさつきね、」

史乃は、タオルを払いのけて『無題V』を一瞥したかと思うと、石畳に叩きつけた。私はとっさに腕で庇かばつて顔を背けていた。幾羽かの小鳥が木からいつせいに羽ばたいた。球体は大きく二つに砕けて空の碗わんのように転がり、周りに破片が飛び散っている。一つだった青が、数えられない青になつている。私は屈かがんで足の甲から重みのある破片をのけた。地面に擦れそうな柳の枝葉を掻き分けて史乃は芝生に出た。それから石灯籠のそばでこちらを振り返つた。

彼女が嫌悪感から私を拒絶している様子はない。ただ、鋭さと虚ろさが溶けずにせめぎあう目の色は、近寄りかたかつた。

自転車の後ろで風を切りながら、彼女が何を考えて口をつぐんでいたのか、私には推し量れない。でも今、史乃のなかでいくつもの波がぶつかりあっているのを感じ取ることはできた。潮流が複雑に入り組み、そこかしこがすばやく渦巻いている沖を眺めるようだった。渦の一つは森

瀬のあの笑顔かもしれないと思つた。夏の裏山、まっすぐに密集する竹林、整然とした庭の松や芝生。莫大な緑に縁取られて音もなく葛藤している史乃はいよいよ白く際立っていた。史乃自身にはそれを見られないのが惜しまれるほど、美しかった。

佐原さんにとっては私の誕生会だった菜食の宴、美術館からの窃盗。史乃と別れ、一旦帰宅してなければの現金とともに再び飛び出すとき、私は唐突にへとへとになった。もうゆっくりとしかこげない自転車は、穏やかに空中分解していきそうだった。

JRの駅の窓口で、復路の切符を買うかと問われ、少し考えてから片道だけにすると言った。雪こそ降らないが、砂丘で駱駝らくたの上から日本海を臨んで佐原さんに正気が戻ってくるなら、彼はしばらく滞在してもいいのだ。正気の在庫はわずかでも預金は明るく残っている。

駅舎の時計は午後六時十五分を指していた。券売機のそばで蚊に刺されながら私は固く握った携帯電話をぼんやりと見つめた。佐原さんに説明しておくつもりで取り出したのだが、自分の返還した盗品が街でちっとも話題にならないことを、怪訝けげんに思うようなセンサーはもう彼にはない。

思い直して私はセツへ電話をかけた。イーダ会の代表がしばらく砂丘暮らしになるかもしれないが、会の運営に差し障らないかと私が尋ねると、差し障らない、ときっぱりセツは答え、そんなことより今からうちに来ないかととても早口に言った。私が今朝佐原さんを誘ったのと同じ文句だった。佐原さんは来てくれた。疲れていて旅行の支度もこれからなので帰れたかったが、それでは今日一日を片面だけで終わるような気がして、私は彼女に道順を詳しく聞いていた。

周りを畑に囲まれた一角にその二階建てのワンルームマンションはあった。夕暮れの用水路が仄暗い水をすばやく運んでいる。ドアを開けて私と目が合っただけで、セツはほっとした顔になった。それは私をかすかに不安にさせた。玄関には見覚えのある、一度も洗われたことのなき

そんなキャンバス地のスニーカーが転がっていた。しゃがんでそれを並べ直す、部屋着のセツの背後から、テレビの音と森瀬もりせの笑い声がまじり合って聞こえた。眼鏡のセツを見るのはひどくめずらしい。

散らかってはいないが使い勝手の悪そうな部屋だった。物を縦に縦に節操なく積みすぎなのだ。救急箱の蓋を開けるためには大量の外国語辞書を下ろさねばならず、きちんと畳まれたブラウスは使用されていない扇風機の上へ不安定に累積し、まっすぐ重ねたCDの頂点にドライヤーが載っている。収納家具という概念の欠けた、中身だけで成り立っている部屋の中央に、正方形の座卓があった。届いたばかりらしい宅配ピザとサラダが派手に彩っている。無地のTシャツに裾をたくし上げたジャージの森瀬が私を振り仰ぐなり、「ちよつとくらい飲めるんやろ？ 乾杯しようさ」と手近な紙コップにビールを注ぐ。彼女が村としてのイーダを「強化合宿」と位置づけたことがなまなましく思い出された。

「今日は何なの」とにかく受け取って私は言った。

「反省会や。セツが、したそうやったから」  
「いや、私が今日したかったのは寝だめに尽きる。でもいい。森瀬の意見は貴重だしね」

セツがさっさと腕を伸ばして私の手の中を麦茶の紙コップとすり替えた。ピザは結果が真つ二つに分かれた円グラフのような色彩で、森瀬は辛い方の半円からばかり取った。

「私の貴重な意見を言います。セツの新しい案は却下やな。それやったら村の方がよっぽど現実味あるわ」

「こないだの、コミュニティサイトを誰でも利用可能にするかどうかでこと？」

「マスコットさん。この人はな、もうまるつきり違うこと考えてはるねん。コミュニティをオープンにするかどうかやなくて、ユーザーをオープンにするねんて」

「まるつきり違うってわけじゃないんだけどね」タンクトップにハーフパンツで立て膝をしているセツは、森瀬から私へ視線を移した。「自己

申告のプロフィールによるんじゃないかと、自己の背後にあるものも含んだ目録を作れないかと思って。本人がまだ自覚してないだけで、その人にはもっと、潜在的な関心や能力があるだろうから」

「セツは相手からそういうのを引き出すのがうまいし、きつと成功するんじゃない？ 目録の最後に『どうしてだかやっってしまうこと』っていう項目があるでしょう。あの欄は会員本人じゃなくセツが書き込むための場所だって、最初から思ってた」

私が言うと、ようこそまで手なずけたもんなやな、と森瀬がセツをからかった。でも私は前回の会合で、森瀬の露骨な手際に嫌悪感を覚えながらも、セツより彼女の意見にひそかに共感したのだ。辛みが苦手で白っぽい色合いのピザを取った私に、セツは簡単な笑みを向けた。

「私にそれが可能なのは、ある程度でも知ってる人に限定される。それに、個人の影響はもう最小限にしないとね。私もイーダの一部だから」

「セツが管理しないなら、誰が見抜く役をするの」

「誰でもない。システムがする」セツは麦茶を一口飲んで言った。「まだ具体的な方策は立てられてないんだけど。イメージとしてはね、記録される情報の集積から傾向が分析されて、最適な次の一手が自動的に抽出されるような仕組みってあるでしょう、それを〈Ida〉に応用する」

「セツの仕事って輸入代行やっただけ」

そこを発端として森瀬がたどろうとしている全容をあらかじ予め肯定するように、セツは深く頷いて言った。

『前にあの商品を購入したお客さんが好みそうだな』とか『そろそろこういうのを欲しくなるんじゃないか』と思う商品が目につくと、勧めあげたくなることもある。まあうちは今のところそこまで踏み込んだサービスはしてないし、中立じゃない私の判断が働いてるわけだから、実際はそこでストップしてるわけだけだ」

「あほやな、あんたは中立にとらわれすぎやねん。もっと人間を愛したらええのに。まあデータベースの構築には膨大な情報の蓄積が必要やし、

結局今の、クローズドなサイトのユーザーでは全く足りひんゆう点ではぶれてへんわけや。マスコットさんはどう思う？」

今日の森瀬はスマートフォンこそ握っていないが、小さなテレビから流れてくる騒々しいバラエティー番組を目の端に映しつづけていた。それでいて話は不足なく聞いている。テレビを見ていないときとどう違うのが、こちらの中であやふやになってくる。

「どうして今のままじゃだめなの？ 必要とする人は確実にいるのに」

私は偽りのない気持ちから言った。前回の会合で目録と村の不等式が森瀬によって唐突に披露されてからも、〈DA〉は続行されている。めつたに家を出ないから〈DA〉が外と繋がる大切な通路だと言う人もいるし、休職・休学中のメンバーのなかには、いつかビジネスとして展開するためのステップアップと捉え、サービス内容を研ぎ澄ませていく人も少なくない。セツは私のほうに身を乗り出し、天板についたその肘が近くの皿やコップを押し動かしても見ずに言った。

「だめだとは思ってないよ。あれはあれでつづけたらいい」

「じゃあどうして」

「森瀬がさ、物騒なアンケートとってたでしょう？」

さらりとセツは言ったが私は相槌を打ちそびれ、いやに慎重にフライドポテトを一本引き抜いた。

「前はそうだね、相手の中から埋もれてるものを引き出すのが人より得意だと思ってた。でもそんなのって自分で気づかないうちに変わってしまうんだね。メンバーたちが、私の意見に頭では賛同しても、もっと反射的で根本的などころでは室木むろきさんの方を今も向いてるって見抜けなかった。イーダを外側から見てる森瀬にはできた。それだっていつまでもつか。私たちは私たち自身にあまりにも騙だまされやすい生き物だから」

森瀬がこちらを向いて「絶対整形してるで！」とテレビに映る女優を顎でしゃくった。その間もセツは喋っていた。

「項目を全部、自分がなしてきたことや、自分では価値を判断できない過去の事実だけで埋めるようなプロフィールでも、本人が編集するとき

の取捨選択では意志が働く。それは自分の可能性を狭めるし、自由なように見えて不自由にしているだけだよ。でもネット上での痕跡として残された過去の事実は、ちがう。たとえその人が、履歴としてどこかに保存されると承知の上で閲覧したり共感したりコメントしたりしていても、その人自身が知らないその人を浮き彫りにすることってあると思う」

セツによる筋書きはこういうものだった。〈Ida〉のユーザーがどのようなサイトを訪れたか、どのような記事や動画等々のコンテンツに反応を示したかといった、ネット上での行動の痕跡は自動的に記録される。集積したデータからは、そのユーザーが何に興味を持っているか、どういう問題を解決したいと思っているかなどの傾向が抽出される。そのプロフィールは常に生成途中なのだ。セツはこの点をことのほか強調した。明らかに的外れなものとは別として、いかに思いがけない雑音が混じっていても、メンバーはそれを一旦引き受ける。外側からやって来る輪郭線で生き、周囲を見渡してみる。その人には同じ問題意識を持つほかのユーザーたちが自動的に紹介される。自分もまた、誰かに紹介されている人たちの内の一人になっている。類似したパターンが自ずから重なり、模様を深める。結合には様々なバリエーションがありうる。単に個性を共有するスペースではなく、個のままでは生み出せない価値を形成していく場合こそ、イーダというにふさわしい。

「今までの目録ではたくさんのマッチングが成立したけど、単位はあくまでも個人だったでしょう。一人と一人の組み合わせで個性を貸し借りました。それに大抵は、一度の依頼でやりとりは完結した。新しいやり方を採用すれば、出来ることの範囲を空間的にも時間的にももっと広げられると思う。同じ目的意識を持つ人たちを引き寄せあうことができるなら、一人では着手することすら難しかったプロジェクトを実現したり、それも一時的にじゃなく継続したりできるかもしれない」

私は返答に困り、音を立ててレタスを齧<sup>かじ</sup>った。

放課後に佐原さんのアパートで授業の予習を済ませていた頃、室木から「ずいぶんセツに気に入られたね」と言われたことがあった。

彼が片手間に教えてくれたおかげで全ての謎が氷解した英語の構文に見とれていた私は、「やっぱりそうですか。理由は思い当たらないけど」と言った。部屋の隅では佐原さんが懸垂器具を使ってわけのわからないハードな運動をしていた。

「思い当たらない？」室木は面白がるように、片手間の表情をやめた。「亜季はここで、自己紹介のときに言ったよね。自分のしてきたことすべては、どういう方向へ転じていくか自分でもわからない素として、自分の中に常に無数にひしめいている。それが生きている間じゅう自分を自分たらしめているんだ、って。あれがセツにとってストライクだった」

室木からは時折脈絡なく、セツをめぐる話を聞かされた。その意味を私は考えたことがなかった。彼が口早にまくしたてればまくしたてるほど、私をめがけているようでいて実は彼自身にだけ向かっている気がして、印象が薄くなるのだった。いよいよ歯切れよく室木は言った。

「以前のセツがこだわってたことって、確定的要素を山ほど持って生まれる自分と、自分のなかみのなき、の落差だろ？ そのなかみっていうのは気持ちとかの内面の話。で、亜季が言う『中』は事実の集まりということだった。彼女はあれを弾みに目録の計画を皆に打ち明けたと思うね。個性を自由化するために、個性の存在を一度はつきり受け入れた」

懸垂器具のそばで膝をついて放心していた佐原さんが、我に返って文机で仕事を再開するのを眺めながら、あのとときは話半分で聞いていた。今は、ひよっとしたら彼の言う通りかもしれない、と思う。けれどセツは新しい段階に進もうとしている。事実の集積から自動的に導き出される、未だ透明なものをも「事実」の域に組み込もうとしている。

網戸にした窓の一つはベランダの出入り口で、別の窓からは薄い紺に染まった畑と畦道、あぜみち街灯の光を載せたビニールハウスが見えていた。セツは言い足した。

「イーダには、人間の集合だけ人間を超えた存在であってほしい」

「セツが言うようにすれば目録の完成度は高くなるのかもしれないけど、

今のが気に入ってるメンバーにとっても本当にいいことなのかな？」

なぜかとげのある物言いになって、私は終わりの方はくしゃくしゃ丸めるように言った。「そやそやメリット言え、メリット」と森瀬が野次を飛ばした。セツはふと睨むような目つきをした。私たちに対してではなく、方角的には正面のベランダで、彼女の洗濯物が干してあるだけだ。「実は特にメリットがあるかもとふんでるのは、目録に参加はしないけど何らかの繋がりを求めてきたり、傷口を見せてきたり、『私はもうそこにいますか』って訊いちやう人たちでね。自分という感覚の薄さは、私もわかる。現行のやり方に対応できないことも。皆で進めるプロジェクトなら、明確な『主体』にならないままでも参加できる余地があるんじゃないかと思って」

セツは眼鏡をぐいと押し上げた。表情はもう常の、さりげないものだった。

『代表こんばんは。私はもうそこにいますか』

最近のそれはハンドルネームが全て異なる。実際に多数の別人が書いているのか、名前を使い分けた同一人物も紛れているのか。私は視力がいい。でも画面をスクロールし、彼らの佐原さんへの問いかけをたどるときは、「見えない」感覚がこみ上げてくる。セツはつづけた。

「そう、無理にプロジェクトに参加しなくていいかもしれない。彼らは痕跡を残していく、それを共有させてくれる、そのことだけで意味がある。本当は私たちがどういふ存在なのかを私たちが知るために。全体にとって自分が素材になる感覚、それをつかめれば彼らが、自分がどこにいるのか問う必要はもうない」

ふつりとセツは黙った。まだ言い連ねようとしていたのを、何かに配慮して自分で遮るように。目黒めくろさんのことを口にしかけたのかもしれないと私は思った。プロフィールの自己申告制は〈Ida〉開始当時からだった。けれど目黒さんの例を境に、自己プロデュースが前面に押し出された成り行きは、もともとはゆるやかな繋がりを思い描いていたセツの予想を超えていた——そういうことはありうるからだ。

「個の向こう側へ」

麦茶を飲んでいた私が、紙コップの小さな暗がりの中で呟くと、そう、とセツは大きく頷いたが、私はただ彼女がかつて言ったことをなぞっただけだった。彼女がああ、顔の見えない人たちにそこまで責任を持つとうとするのが当たり前のことなのか不自然なことなのか、わかりかねた。セツは見るともなく私を見ている途中で意外そうな顔になった。

「なに」私は言った。

「私は彼と一度も旅行しなかったな。ついにあのレベルの乗り物酔いに効く劇薬が開発されたの？ 何かで気絶させてから君が運ぶの？」

「一時的に完璧に、自分の体質を忘れてみたい」

「いちかばちかですらないね」

「なんや泊まりか？ えらそうに」森瀬はよそ見したまま鼻で笑った。

セツが「個を超えたものの一部」として自分を位置づけ直せたことの根もとには、まちがいないく佐原さんとの大恋愛があった。それは他のメンバーに置き換え可能なものではない。佐原さんとセツの関係性を抜きにしては成立しなかった状態。それが、恋愛を度外視してイーダ会のイメージにそのまま流用されたように思えて私が不服をもらしたとき、セツは全然取り合ってくれなかった。けれど彼女もどこかで引かかっているのではないかと疑いたくなるときがある。佐原さんを通して自分が経験したのとひとしい状況を、佐原さんを通して誰かが経験できるようにやり方を、提示する責任が自分にはある、と。

それにしても先のセツの意見は、最後にさしかかるにつれ室木の言い分と交差していくように思えた。全体にとって自分が素材になる。いるだけでいい。まるで彼が心に映しつづけている村だ。個になる前に戻るより個の向こう側へ進む方が面白い、かつて彼女は私にそう言った。

森瀬は番組に出演中のタレントの発言に声を立てて笑い、缶ビールを呷あぶって、セツの新しいビジョンは、同じ角度からの別のアプローチでいくら現実味を増すかもしれない、とやにわに提案を始めた。

「セツが言うように今の目録にはストック面しかないやろ。そやから同

時にフローの方にも力を入れるべきやと思う。鍛錬して獲得した技能とか資格だけを、その人の代名詞にするんやのうてな。そのときの気分とか考え方とか、流動的で移ろいやすいもんもその人の『情報』やし。今何をしてるかっていう現場からの報告、あるいは、『趣味』にまではカウントできひんけど今関心があることとか行ってみたい場所とかの希望。そういう、会員たちがばらばらに発信するリアルタイムの何気ない声をまとめて反映するフォームって用意できひんやろか。ある人のこの瞬間だけの情報と、別の人のこの瞬間だけの情報が、そこでならパッと結びつくような。あんたが言うほど大仰にシステム変えんでも、それで自己申告の落とし穴を免れることにならへんか？」

「そうだね。いいかもしれない。またヨーに相談してみる」  
「なんやねん。いきなりひとごとみたいに」

森瀬は口をとがらせ、私の取り皿のピザに残りの唐辛子ソースを全部搾り出した。私が異議を唱えるまもなく、再びセツが自分の、まだ口をつけていない一切れとさっさと交換してくれた。この二人が何時ごろから一緒にいるのか知らないが、セツは森瀬の押しの強さをこうやってかわしつづけ、偶然私から電話が掛かってこなければ第三者に中和させる気もなかっただろう。森瀬に対しては普段よりむきだしになってしまっている私たちとは逆に、セツは軽めに負けておくことが多い。そんなことを考えていたらセツが思いがけないことを言った。

「新しい仕組みがきちんと機能しはじめたら、私はイーダ会を抜ける」  
私は驚いて、無意識にリモコンでテレビを消してしまった。森瀬は言った。

「飽きたら、また新たにコントロールしやさいご一行様を探すんか」  
「そうだよ」

セツは今日いちばんのすつきりとした笑みを浮かべた。すると森瀬は、特徴のない端正な白い顔を壊れた人形のように反らせ、声を立てずに大きく笑った。その光景はすばやくて静かな試合みたいだった。

「ほんまの理由は室木さんやろ？」 森瀬はセツの目を覗きこんだ。「あ

れだけ憎まれたら、そら居づらくもなるわ」

何も言わず立ち上がったセツが窓ごとにカーテンを閉めた。

「ひとりの他人をはつきり憎悪したのは、室木さんにとってこれが初めてちゃうか。セツは他人をよく観察するけど、『個』としての自分に愛情が薄いやろ？ 室木さんが自分の周辺の声なき声を吸いとりやすいのは、『個』の閉じ方が半端やからやろ？ あんたらはある側面では似てる」

私は憤慨して口を挟んだ。

「セツ、室木さんにひどいことをされたりしてるの？ 知らなかった。言ってくればよかったのに」

「ホームルームの議題に挙げてくれそうな口ぶりだな」セツは吹きだすように言った。「まだ何もされてないよ。ほら、一緒にいたらうすうす伝わってくるものってあるでしょ。愛とか殺気とか」

ちっとも安心できる回答ではない。

「失礼な言い方だけどさ、セツの圧勝みたいに見えるて実は室木さんの言う村の方が皆を引きつけてるってことが、あんなに効果的にばらされただから、室木さんは満足でしょう？」

「でもたぶん彼は、きちっと信じる事ができてない」

セツの奇妙な言い回しに私が怪訝な顔を見ると、分け前が歴然としているものについては決して侵犯しないが、サラダやフライドポテトなど思い思いに着手するタイプのものは私物化してしまうおそろしい森瀬がこちらを向いた。

「室木さんかて結局、目に見えてるもんの方に騙されたからセツを許せへんようになってきたわけやろ。それがわかって満足するか？ 彼は今、信じるゆうことの手前でゼンマイが切れてる。セツを憎んだまま」

「最初の頃は見抜いてたよ。メンバーは、口に出さないだけで目録化に漠然と抵抗感をもってるって。『矢印』の強さと渡り合えないだけだつて」

セツの手前かなりためらいながらも、決心して私はそう言ったが、二

人の女の感情にさほど響いた様子はなかった。森瀬は言った。

「イーダ会員にほんまにイーダをサツと見せた最初は、室木さんの夢物語やなくて、セツの実践や。それは、皆の話ぶりを聞いてたら私でもわかる。そのへんから自分の直感を信じられへんようになってきてたんちやうか、室木さんは」

それから森瀬は唇についた油脂を指で拭いながら、「なあなあ、白元うすもとも呼ばへん？」とセツに言った。その若い男は、森瀬経由で佐原さんのアパートを度々訪れるようになった系列の一人だ。イーダを、生きていく上での指針ではなく、「シェアハウス」なるものだと解釈してやってきたらしい。それは何ですか、と居合わせた私が尋ねたら、面倒そうな笑顔だけが返ってきた。しかし私はそのことよりも、生地の質感はくたくたとして貧相なのに妙におしゃれに見える着こなしに、ずるそうな印象を持った。これがあればどこでも仕事のつづきができる、となめらかな形の薄いノートパソコンを持ち込んでひっきりなしに打っている。口を開けば「楽しく生きよ」というスローガンが飛び出す仕組みになっているらしい白元だが、メンバーとは個人的な話をしない。内輪の話で森瀬と盛り上がるのを好む。ただ佐原さんについては、やはり解釈に失敗したらしく、「代表は、さすがについてうか。自分の場所とか時間とかを他人に開放して、一期一会の奥深さ教えてくれる」などと、頭の中が無人駅になった佐原さんに自分の存在が記憶されないことをありがたがっている。もう一人の例外はセツだった。白元はセツがいると、大事なパソコンを置いて必ず彼女のそばに行った。

セツは空いたピザの箱を潰しながら、「まかせる」と言った。特に鬱陶しがっているようにも見えなかった。それから私の方を向いて、「急に誘ったのに来てくれてありがとう。この辺はさっさと真っ暗になっちゃうからもう帰りな。自転車だよな？」と少し優しい顔をした。明日は佐原さんと砂丘に行くのだという、澄んだ計画がよみがえってきた。森瀬が白元に電話をかけ、手近な紙製の皿やコップを私が片付けていると、床板の上でセツのスマートフォンが振動した。森瀬が掛け間違ったのか

とおそらく三人ともが一瞬思ったが、白元は電話に出たようだ。セツも耳に当てて通話し始めた。「室木さんが何？」と聞き返しているところによると、メンバーからなのだろう。

「ちよつと落ち着いて話してくれる？」

セツにしては声が大きかった。白元の声が聞きづらくなったらしい森瀬が片耳を掌で覆って洗面所に移動していく。驚いたことに、引き寄せたリュックサックのポケットで、私の携帯も着信を報せていた。ヨーの名前が表示されている。彼女と連絡を取り合ったことなどない。

「もしもし」私は少し緊張して言った。

「亜季？ あのね、今イーダ会がややこしいことになっててね。セツに掛けたんだけどつながらなくて」

ヨーの声は、芯が不安定ながらきびきびとしていた。私は言った。

「いっしょにいます。たぶん、同じ用件のメンバーからの電話に出てる。何があったんですか」

「どこから話せばいいんだろう。結論を言うとな、イーダ会が詐欺罪で訴えられるかもしれない」

「さぎざい？」

「室木さんが私たちには内緒でクラウドファンディングで資金調達して、トラブルになったみたいで」

「雲の？ 何？」

「ーじゃなくてrの方。『群集』。企画の実現に必要なお金を、ネットを通じて不特定多数の人から募ることだよ。室木さんが登録してたのもそういうプラットフォームの一つで。審査にパスしたら、プロジェクトが掲載されるわけ。目標金額や募集期間や、支援者への金額ごとの見返り内容と一緒にね。目標に届かなければ出資者に返金される」

「室木さんの企画っていうのは、例の村ってこと？」

「若干イメージは変えてある。コミュニティカフェだったかな。『生きづらい若者たち』が対象になってるのは同じだけだね」

にわかに自虐的な、空気をがりつと削るような声でヨーは言った。そ

れから私に口ごもる隙さえ与えずもとの口調に戻った。

「私もまだ事情が把握できてないんだけど、そのプラットフォームの、支援者からのコメント欄に投稿された記事が、バーツと拡散しちゃったんだと思う。糾弾されてるのはまず、企画の説明文に虚偽の証言が含まれてること。現状では村はないけどほぼ共同生活をしていて、その中で鬱病の回復も見られた、と書かれてる。次に、イーダ会という名前を一切表に出さなかったことの不自然さ。で、無反応に徹してた室木さんがやっと表明した、これがダントツにまずい。資金が消失したのに黙ってたこと」

「誰がそんな」

私はセツの方へ目を遣った。セツはパソコンをひらいていて、もともと<sup>まなむり</sup>と毗の軽く上がった目をみはり、画面を見つめながら通話していた。ヨーは言った。

「まだわかんない。そもそも、目標金額に達したあと室木さんからの報告が途絶えたことに、支援者からの問い合わせが相次いでたのを放置してたらしくて。それで、彼らによってあれこれ調べられながらなおかつ応じようとしないう室木さんに代わるみたいに、さっき言った記事が投稿されて引き金になったってとこかな。イーダ会員の内部告発風なんだけど、匿名で。室木さんのプロジェクトがスタートしたのは二カ月前だけど、今になって突然槍玉に上がった」

「ヨーはどうやって気づいたの」

「イーダ会のブログ見てごらん。炎上してる。ああ、炎上っていうのは、」

「だいたいわかります」

私はセツの背後に回り、床に膝をついて画面を覗き込んだ。

『何このゴミみたいな団体』『自分たちのしたことをわかってるんでしようか？ みんなの善意を踏みにじるようなことをして、どうして平気でいられるのか理解に苦しみます』『結局サギの同好会ってことでもいいのか？』『何の説明もしないのはあまりにも無責任。出資した人たちに

対してだけでなく、運営元や他の企画立案者にも多大な迷惑を掛けていることを認識すべき。』『ゴミ以下』『一刻も早く謝罪してください』

ふらふらと顔を上げた。洗面所の電気が消えていた。そのときになつて私は、森瀬の姿がないことに気づいた。携帯を耳に押し当てたまま小走りですぐまで行くと、汚れたキャンパス地のスニーカーは忽然と消えていた。

「亜季、聞こえてる？」

「うん」

「室木さんとは連絡が取れなくて、家にもいないみたいで、あつ」

「なに」

「どうしよう室木さんが、」きびきびしていたヨーの声が大きく揺れた。「プロジェクトのリーダーはイーダ会の細野節子で、自分は彼女の指示に従っただけだから詳しい説明はできかねるってたつたいま応じた。消えたお金の行方も彼女が知ってるだろうって」

私は壁に寄りかかり、右手で左の脇腹をきっちり抱え込んだ。やがてヨーが呟くように言った。

「ひどい。もうセツが何者かかってことが騒がれだしてる。こんなどうやって収拾つけなければいいの」

「佐原さんは？ ヨーは今どこにいるの？」

「もちろん代表の部屋に行つて、渦中のサイトも目の前に差し出してみたんだけど、なぜか野草図鑑読んでてさあ」

無理にでも、部分的にでも緊張の糸を弛めようとする息遣いで、彼女は言った。だいたいわかります、と私の口も勝手に、水準を合わせた。

「代表といってもかえって心境がまとまらないから、今は、駆けつけた何人かと私の部屋にいる。よかつたらセツと一緒に来て」

そうする、と返事をして私は電話を切った。いつのまにかタンクトップの上にパーカーを羽織っていたセツが、私にヘルメットを寄越した。表情は険しいが、ヒステリックな気配はちつともにじませていない。テレビ中継で見ている嵐の映像みたいだ。

「私だったらそんなに落ち着いていられない」

「十も年下の子の目がなければ露骨にわめきちらしてらるって。私も、さつきまでの君の電話相手も」

外に出ると、膨れ上がった雲が畑の上の闇夜に浮かんでいた。私は自転車を残してセツのスクーターの後ろにまたがった。

〈続く〉

牧田真有子（まきた・まゆこ）

80年生。「椅子」で「文学界」新人賞奨励賞を受けデビュー。人が抱く寄る辺なさと、世界が孕む不確かさを、丁寧にすくいあげ描きとる。主な作品に「夏草無言電話」（「群像」09年5月号）、「予言残像」（「群像」10年6月号）、「今どこ？」（「WB」20号）、「合図」（「早稲田文学記録増刊 震災とフィクションの距離」）、「動物園の絵」（「早稲田文学」⑥）など。

早稲田文学・オン・ウェブ

copyright by Makita Mayuko 2014

published by wasedabungaku 2014